

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 14 日現在

機関番号：13501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2020

課題番号：16K17437

研究課題名（和文）手書き文字の字形と学習者の主体性に関する研究 - 大正期から昭和初期を中心として

研究課題名（英文）Handwritten Character Forms and Learner Subjectivity: Focusing on the Taisho and Early Showa Period

研究代表者

清水 文博 (SHIMIZU, Fumihiro)

山梨大学・大学院総合研究部・准教授

研究者番号：40747953

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は大正期から昭和初期の書字学習の実際について字形指導を中心に検討した。この時期の書字学習は新教育運動や同時期に起こった毛筆書方廃止運動、漢字政策の動向、書道振興等の影響を受けたものであることを提示した。そして昭和初期における学習者の手書き文字の規範となった、第四期国定国語教科書である『小学国語読本』の教科書体や『小学書方手本』の手書き文字規範との関係性やその変容を解明した。また教科書作成の経緯や字形指導に尽力した人物について、さらに半紙綴りや書方コンクールの開催の考察を通して字形と学習者の主体性の実態を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

昭和初期、国語書方教科書の毛筆の手書き文字の規範の書風が変化し、初唐の楷書に範が求められた。同時期、国語読本の本文には組み換えがきく教科書体活字が作成された。この時期に採用されていた字形や字形指導の考え方は戦後も色濃く受け継がれており、その意味において今日の書字学習の土台が作られたとよい。また、教科書は学習者の主体性を重視した新教育運動の影響を受けている。本研究は大正期から昭和初期の字形指導を多角的に考察することにより、学習者の主体性を重視する今日の書字学習を構築するための基礎研究であり、これからの書字学習の方法論や学習の基盤となる字形規範の開発につながるものである。

研究成果の概要（英文）：This study examines the actual state of calligraphy studies in the Taisho and early Showa periods, focusing on instruction on character forms, and proposes that calligraphy studies in this period were influenced by the New Education Movement, contemporary movement to abolish brushstrokes, trends in Chinese character policy, and promotion of calligraphy. It also elucidates the changing relationship between the textbook format of Shogaku Kokugo Tokuhon and handwritten character examples of Shogaku Kakikata Tehon - fourth generation national Japanese language textbooks - that became the norm for learners' handwritten characters in the early Showa period. In addition, it clarifies the actual state of the subjectivity of character forms and learners by discussing the people who were involved in the creation of the textbooks and had devoted themselves to teaching character forms as well as extant writing on calligraphy paper, and the holding of penmanship contests.

研究分野：書写書道教育

キーワード：字形 学習者 書字規範 教科書体 手書き文字 小学書方手本 小学国語読本 大正期から昭和初期

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

現在の国語科書写教科書に掲載されている書字規範は、文字の字形の一例を示したものである。字形の一例ではあるが規範の細部にこだわる指導が行われることは多い。漢字の書き取りでも同様の問題がある。型にはまるといふ行為は、書字行為の本質の一つである。一方、学習者の主体性は書字規範の型にはまらないところで発揮され、字形の多様性は伝統的に幅広く認められている。学習者が主体的に文字を学習するためには、学習者と書字規範の関わりの研究が進められる必要があるであろう。

本研究では学習者と書字規範の関わりの解明のために史的研究を試みたい。いわゆる手本は近世以前から現在に至るまで、書字学習には必要不可欠なものである。教科や科目の変遷はあれども書字学習に字形の模倣学習をどの程度取り入れ、学習者の書字の個性を育むのかという問題は不易の問題である。過去の書字教育に関する著書では、規範的な文字の字形の批判やそれとからめた学習性の主体性の問題が幾度となく取り上げられている。

2. 研究の目的

現在と同様、国語科に毛筆書字のとりたて学習が位置づけられていたのは、1900(明治33)年の国語科の成立から1941(昭和16)年の国民学校成立までの国語書方期である。書方期は現代と似通った問題意識を有している。既に毛筆は実用の筆記具ではなくなっており、児童中心主義がめざされた大正新教育運動の時期も含んでいる。1933(昭和8)年からは、国定第四期の書方教科書が使用された。この教科書は戦後の毛筆手本文字の書風の典拠となった国定第五期本と共通する部分が多い。四期では毛筆の大字精習主義がとられることとなったほか、漢字や書字の規範とされた教科書体が活字となりその後の活字デザインに大きな影響を与えてもいる。この教科書の成立の過程や字形学習の状況については特に丁寧に取り扱い、考察する必要がある。これからの時代に適合させ、かつ過去の歴史をふまえた書字規範の作成の基礎研究として大正期から昭和初期の書字規範と学習者の関わりについて検証する。

3. 研究の方法

本課題では大正期から昭和初期、国語書方期の書字規範と学習者の関わりについて明らかにするために次の5項目に取り組んだ。

- (1)教科書執筆者 (2)書方コンクール (3)書かれた史料
- (4)書字規範と教科書体 (5)字形指導

それぞれについては、使用された教科書や教授法書類の分析、聞き取り調査等の方法により考察した。(1)~(3)は前半、(4)、(5)は後半に行った。(1)~(3)では書かれたり刻されたりした資料調査と、文献調査を照らし合わせる方法による考察を主とした。(4)は教科書文字のスキニングや分類による比較、教科書の使用年度による字形の違いの検討など、文字の字形の比較検討を主とした。(5)は教授法書や教育雑誌、競書雑誌等の記述を追うものが主となったが、字形指導に尽力した人物研究も行うこととした。

4. 研究成果

(1)教科書執筆者

第四期国定書方手本執筆者のうち、特に力を入れたのは甲種執筆者の鈴木翠軒である。国定第四期本を考察する際の資料としてこれまで参照されてこなかった雑誌、『新興日本書道』を収集し、発行した新興日本書道会についても考察した。『新興日本書道』には、翠軒自身が国定教科書の執筆にあたりどの古典を参考にして書いたのかを記述しており、執筆当時の様子が推察できる。『新興日本書道』に掲載された国定教科書の参照古典を分析することにより、これまでいわれてきた初唐の三大家の影響を確かめることができた一方、従来言われていたよりも多様な古名蹟が参考にされていたことが明らかになった。以上につき書道史の学会にて発表した。

(2)書方コンクール

これまで書方のコンクールや展覧会の開催については書写書道教育史上あまり目が向けられてこなかったが、コンクール等の開催は、学習意欲の向上などに戦前から大きな役割をはたしてきた。特に大規模な健康報国と関連した書方奉獻活動は、戦前期の書方展覧会の代表的なものであり、この詳細について調査研究した。また、コンクールの内容を記した碑の存在を明らかにした。このほか、書方と図画との関連として、懸賞コンクール等についても言及した。両者が積極的に歩み寄ろうとしていた例はあまりないのではあるが、同じ平面実技ということで双方が一緒に展示されたり、審査されたりしたことについて明らかにした。

(3)書かれた史料

当時、児童が書いたものを探るには、展覧会の図録類のほか半紙綴りについても着目される必要がある。新潟県十日町市松之山地区、下川手集落に保存されている史料につき、これまで絵画分野の研究がなされてきたが、書方資料についても考察した。書方の史料は確認分をすべて撮影し、国定第三期から第四期にかけての書方の半紙綴りの書風を分析するなどして作品群の概要を報告した。

コンクールの図録類には技能の高い児童の作品のみが掲載される。通常の半紙綴りは個人の作品を綴ったものである。この半紙綴りは回覧を目的としたものであり、地域の多様な学習者の作品が綴じられているという点で貴重な史料である。第四期本では、新書風による書方展覧会の開催などの作品鑑賞が、全国的な新書風のブームを牽引した。下川手集落の場合は回覧による鑑賞と競争意識が新書風の普及を推進したことを明らかにした。

(4)書字規範と教科書体

三期から五期の尋常小学校(国民学校初等科)の教科書体と楷書の手書き文字規範を集字し、同一文字の比較ができるようにし、平仮名、片仮名、漢字を比較検討した。

平仮名については、図書監修官のほか、四期の乙種手本執筆者である高塚竹堂が関わり、高野切本古今集等の字形を取り入れた教科書体が作成されていたことを明らかにした。また、高塚の字形資料や教科書体の原稿執筆者の井上千圃の硬筆手本等を比較検討した。片仮名については、字形比較を中心とした検討を行った。

漢字については、三期から五期の尋常小学校、国民学校初等科の新出漢字と楷書の手書き文字規範をスキャンして集字し、同一漢字の比較ができるようにした「手書き文字規範と漢字教科書体：国定第三～第五期」を作成した。漢字はとめやはらいなどの点画の変化、また、接し方、交わり方は手書き文字規範が新たな教科書体のかたちを受けていないこと、教科書体と大きく離れた書写体は四期のみで掲載されたことを確認した。五期(国民学校)において書写体以外は基本的に四期のもを引き継いでおり、現在の許容程度のものが採用されている。『コトバノオケイコ』は、基本的には教科書体と同じ字形をめざしているが、細部では必ずしも教科書体と一致していない。後半になるにしたがって教科書体に近づくものもある。

また、主として漢字で行われた四期使用中における書写体等の字形訂正についても検討した。編纂趣意書に記されない教科書の字形訂正は、これまで触れられてこなかったものであるが、手書き文字の規範を活字に合わせるという事象は教科教育史のうえで特筆されるべきものである。具体的には「木」がはねないようにされる、省かれていた「流」の右上の点が書かれるようになる等の時期を特定した。

平仮名、片仮名、漢字すべてにおいていえることは、活字であるなしに関わらず、習得時に学習される教科書体字形の影響力の高さ、規範性の高さが大きいものであることである。毛筆で書かれた手書きの規範の字形の幅については、図書監修官がその学習意義等を強調したが浸透が難しかったという実態があったのである。

(5)字形指導

漢字の字形の指導の基礎理論としてある基本点画と間架結構については、国語書方期になり水戸部寅松らにより、その整理が推進された。この時期に出版された教授法書類をみると、結構法を重視するものとそれほど重視しないものがある。重視しないものの多くは書方の芸術教育的要素が重視された国定第四期本の使用時期である。石橋犀水らがまとめた点画や結構法は国民学校で採用されている。結滞の方法として分間を取り入れ、筆法、間架結構ともに10程度に分けた方法は、明解なものとして評価できることを学会発表した。また、字形指導に尽力した水戸部寅松については、勤務大学の前身の出身者であること等をふまえ、教師生活全般についての整理検討を行った。

字形指導のほか、全国で行われた実技講習会の内容や、戦後ほぼ忘れられた存在であった文部省の習字講習会についても考察した。特に、教科書執筆者の鈴木翠軒の講習や、高塚竹堂のもの、漢字の字体字形についての比田井天来の講習を取り上げた。中等学校習字教育協会の書道振興とともにあった文部省書道講習会であるが、そこでは指導者比田井天来の協会への影響の深さをうかがうことができた。

本研究は以上の観点から大正期から昭和初期の字形学習を検討した。大正期から昭和初期の教科書や関連資料をみると、旧字体が採用されているため、今日の学習との断絶を感じることもある。しかし、この時期に採用された字形や字形指導の考え方は、今日受け継がれている部分が多々あり、現代の字形指導の基盤研究となる要素は大きい。本研究は学習者の主体性を重視する今日の書字学習を構築するための基礎研究である。本研究の内容は今後の字形指導のほか望ましい書字規範の作成の検討に繋がられるべきである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 清水文博	4. 巻 (35)
2. 論文標題 『小学国語読本』『小学書方手本』の字形訂正 「木」のはね、書写体、教科書体と明朝体等	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 書写書道教育研究	6. 最初と最後の頁 77-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水文博	4. 巻 (33)
2. 論文標題 文部省習字講習会と小学校書方指導	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 書叢	6. 最初と最後の頁 37-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水文博	4. 巻 (32)
2. 論文標題 水戸部寅松の教師生活と書方教育研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 書叢	6. 最初と最後の頁 29-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水 文博	4. 巻 (33)
2. 論文標題 昭和初期における漢字手書き文字規範と教科書体	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 書写書道教育研究	6. 最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水文博	4. 巻 (31)
2. 論文標題 国定第四期国語書方教科書対応の講習会について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 書叢	6. 最初と最後の頁 12-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水文博	4. 巻 11(1)
2. 論文標題 平仮名書字学習における教科書体 - 国定第四期, 第五期国語教科書を中心に -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編	6. 最初と最後の頁 495-507
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 清水文博	4. 巻 (5)
2. 論文標題 文部省活字導入期における片仮名手書き文字規範	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東アジア書教育論叢	6. 最初と最後の頁 78-89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水文博	4. 巻 (32)
2. 論文標題 昭和初期の書字学習と書方教科書 教科書体を起点として	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 書写書道教育研究	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水文博	4. 巻 (30)
2. 論文標題 国定第4期書方教科書書風の展開 書方コンクールを中心として	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 書叢	6. 最初と最後の頁 37-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水文博	4. 巻 (10)
2. 論文標題 鈴木翠軒の国定教科書執筆 新興日本書道会を中心に	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 大学書道研究	6. 最初と最後の頁 39-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水文博 渡部晃子	4. 巻 9(1)
2. 論文標題 昭和初期における書方と図画の関連について	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編	6. 最初と最後の頁 157-166
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 清水文博
2. 発表標題 水戸部寅松の教師生活と書方研究
3. 学会等名 新潟大学書道研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 清水文博
2. 発表標題 昭和初期における書字規範と字形指導
3. 学会等名 第34回全国大学書写書道教育学会(鳥取大会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 清水文博
2. 発表標題 昭和初期の漢字教科書体と手書き文字規範
3. 学会等名 第33回全国大学書写書道教育学会(滋賀大会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 清水文博
2. 発表標題 国定第四期書方教科書と川谷尚亭碑
3. 学会等名 平成29年度新潟大学書道研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 清水文博
2. 発表標題 昭和初期における書字学習と書方教科書
3. 学会等名 第32回全国大学書写書道教育学会(東京大会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 清水文博
2. 発表標題 鈴木翠軒の書風形成 国定教科書執筆を中心に
3. 学会等名 全国大学書道学会平成28年度(岩手)大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

学術展示企画「水戸部寅松の教師生活と習字研究」 2019年7月 於 新潟大学駅南キャンパスときめいと

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関